

# 1880～1890年代におけるヨーロッパ人による ピグミー調査の進展

北 西 功 一

Advances of Field Research for the Pygmies by Europeans in 1880s-1890s

KITANISHI Koichi

(Received September 28, 2012)

## はじめに

古代ギリシャ以来、ヨーロッパではピグミーの伝説が様々な形をとりながら受け継がれてきた（北西，2010b）。一方で、1860～70年代に中部アフリカで体の小さな人たちが発見された。1860年代後半のDu Chailluの報告は当初あまり信用されなかったが、1870年のSchweinfurthによるAkkaの発見は当時のヨーロッパの学会で真剣に議論され、MianiによってAkkaの少年二人がヨーロッパに連れてこられることで体の小さな人たちの存在は確実なものとなった。そして、この人たちをピグミーと呼ぶことが次第に増えていった（北西，2011）。

本稿で取り上げるのは、発見が確認された時代以降の1880～1890年代の調査である。この時期、中部アフリカ内陸部にはヨーロッパの数か国が探検隊を送り出しているが、これらは直接はピグミーの調査を目的としたものではない。植民地の確立のために派遣された探検隊が、その途上でピグミーと出会ったり、現地の人たちから話を聞いたりしている。ただし、その探検記を読むと調査者のピグミーへの関心の高さがわかる。ピグミーと出会うことは他の民族に比べると困難なことが多いにもかかわらず、調査者はなんとかして会おうとし、また近隣の人たちから彼らの情報を収集している。

1880～1890年代のピグミー調査にはいくつかの進展が見られた。一つ目は調査地域が広がったことである。詳しくは本稿で述べていくが、SchweinfurthはAkkaの居住地ではなくMonbuttooのMunza王のもとで暮らしているAkkaを観察しただけであり（Schweinfurth, 1874）、実際にピグミーが分布している地域まで行っていない。1880～1890年代には、コンゴ川水系を広く探検することに伴って各地でピグミーが発見され、現在知られているピグミーの中である程度大きなグループはほぼ確認された。また、直接ピグミーを観察したり、居住地のすぐ近くで近隣の農耕民に話を聞くことで、かなり具体的にピグミーの生活や農耕民との関係がわかるようになった。これらについて本稿で取り上げる。

1860～1870年代のピグミーの発見以降、彼らをどのように理解したらよいか、当時の探検家や研究者は盛んに議論していた。例えば、ピグミーはヒトなのかサルとヒトとの中間的な存在なのか、原始的なヒトなのか退化した黒人<sup>1)</sup>なのか、中部アフリカのピグミーは一つのグループなのかいくつかに分かれているのか、南部アフリカのブッシュマン<sup>1)</sup>との類縁関係はどうなのか、といった議論である（北西，2011）。これらの中には、少なくとも人類学者の間ではほぼ結論が出たものもある。それはピグミーはヒトなのかサルとヒトの中間的な存在なのか

という問いで、ピグミーは明らかにヒトであるとされた。ただし、この研究者の結論も一般大衆もしくは探検家に普及していたかは疑問である。また、その他の問いは仮説が提出されているものの、答えが確定したわけではない。1880～90年代の調査でもこれらは大きな問題となっており、これらの点についても本稿で取り上げていきたい。

なお、本稿ではアフリカで現地調査した人たちの報告だけを取り上げている。この時期には何人かの人類学者がこれらの報告に基づいて上記の問いについて議論を行っているが（代表的なものにQuatrefages (1887)、Flower (1889)、Schlichter (1892))、本稿では紙幅の関係上取りあげることができない。今後、これについてもまとめる予定である。

## 1. Emin PashaおよびStanleyを中心とするEmin Pasha救助探検隊

### (1) Emin PashaとEmin Pasha救助探検隊

Emin Pashaは1878年にエジプトの赤道州(現在の南スーダンの一部)の総督に任命されたが、いわゆる「マハディの反乱」のために南方へ避難し、1883年にMonbuttu(Mangbetu<sup>2)</sup>)の地域に、そして1885年にアルバート湖の近くのWadelaiに到達した。1886年にはその情報がJunkerを通してイギリスに届き、救助隊を派遣することとなった。その隊長となったのがStanleyである。1887年1月にStanleyはロンドンを出発した。彼はベルギーとの関係もあったため、コンゴ川をさかのぼるルートを選択し、Aruwini川からIturi川を経由して、アルバート湖に至った。しかしそこにEmin Pashaはおらず、また森に戻ってBodo砦を建設した。Stanleyは1888年4月に再びアルバート湖に行ったときに、ようやくはEmin Pashaと会うことができた。その後、StanleyはEmin Pashaと分かれて森の残してきた部隊を捜索するために森に再び入り、一方、Emin Pashaは自身の部下の囚われの身となったりした。アルバート湖岸のStanleyのキャンプでStanleyとEmin Pashaは再び会い、Stanleyはインド洋岸に出て帰ることを主張したが、Emin Pashaはなかなか納得しなかった。結局、1889年4月にStanleyが強引に出発し、Emin Pashaもそれに従った。彼らは1889年12月にインド洋岸のBagamoyoに到着している (Emin, 1888; Stanley, 1890a; b)。

この逃避行及び救助のための探検においてEmin PashaやStanley、さらにその救助隊のメンバーに含まれていたJephsonやParke、また彼らと一時的に旅を共にしたJunkerやStuhlmannなどがIturi川やアルバート湖とエドワード湖を結ぶSemliki川の付近でピグミーと出会っており、彼らの探検記にそれが記載されている。

### (2) Henry Morton Stanley

まず、最もピグミーについての記述が多いStanleyについて、彼の探検記であるIn Darkest Africaに基づいて紹介しよう。最初にピグミーの分布域と名称について述べる。彼によると、ピグミーはNgaiyu川から東のIturi川の北側に高い密度で分散しており (Stanley, 1890a: 208)、また、Semliki川沿いの森の地域にもピグミーが存在しているという。彼に特徴的なことは、これらのピグミーを身体的な特徴に基づいて二つの種 (species) に分けていることである。この二つをそれぞれWambuttiとBatwaとし、Wambuttiはピグミーの分布域の南側、Batwaはその北側と東のSemliki川沿いの森にしている (Stanley, 1890b: 104)。ただし、Semliki川沿いのピグミーは別のところでWatwaとも表記している (*Ibid.*: 263など)。

次に彼が用いているピグミーに対する用語を見ていこう。彼は主にピグミー (pigmy) とコビトという二つの名詞を使っている。古代ギリシャの話ではピグミーが使われ、小さな体格を

強調したい場合にはコビトが使われるということはあるが、それ以外で使い分けはされていない。その他にはWambuttiやWatwaといった民族名、小さな人たち (little people) というものがある。

ピグミーについての記述は多いが、彼らの生活について述べている部分はそれほど多くない。それはStanleyがピグミーと敵対して戦闘を繰り返しており、それに関する記述が多いためである。また、Stanleyは時折ピグミーを捕まえて尋問するということはあっても、ピグミーのキャンプで友好的に彼らと交渉し、彼らの生活を観察する機会には恵まれていない。彼が訪れたピグミーのキャンプはほとんどがもぬけの殻であった。Stanleyがピグミーの生活について述べている部分について紹介しよう。

ピグミーは農耕民の村から2、3マイルのところの村のキャンプを作る場合と、森の中にキャンプを作る場合がある。大きな畑のまわりには8～12のピグミーの集団、人口では2000～2500人が住んでいるという。おおざっぱに計算するなら一つの集団が200人以上となる。また別のところではStanleyが見た放棄されたピグミーの村には92の小屋があり (Stanley, 1890a: 227)、現在知られているピグミーのキャンプからするとかなり大きい。

彼らには男女の分業が存在し、男性が狩猟、戦闘、政治を行い、女性が食料や薪の採集、料理、様々なものの運搬を行う。狩猟方法はいくつかあり、弓矢猟では、小さな弓矢を用い、矢の先には毒が塗られている。槍猟ではゾウやバッファロー、アンテロープを殺す。罾では落とし穴や上から物が落ちてくる圧殺罾、跳ね罾などがあり、いろんな動物が獲れる。ハチミツも採集している (Stanley 1890b: 100-108)。

Stanleyはピグミーの集団に長 (chief) が存在すると述べ、その妻を女王 (Queen) と呼んでいる (Stanley, 1890a: 367)。ピグミーの集団に秩序があることを示唆している。

ピグミーは近隣の農耕民に獣肉や毛皮を提供し、見返りにバナナやイモ、タバコ、槍の穂先、ナイフ、鍬などを手に入れている。ただし、農耕民からの見返りが不十分なときは彼らの畑から農作物を奪う。農耕民はピグミーの盗みに悩まされながらも我慢している。ピグミーが農耕民に提供するサービスとして重要なのは、偵察や戦闘における貢献である。ピグミーは森の知識を利用して農耕民の畑と集落を監視し、外部者に対して攻撃する。ピグミーに支援された部隊が戦いに勝つとも述べられている。このようにピグミーは特定の農耕民と団結しているという (Stanley 1890b: 100-108)。

ピグミーの人類における位置について述べている文章がいくつかある。例えば、「私たちは森の原始的な人種 (primitive races) を知っている。Akka, Wambutti, Watwa, Bushmenである。その中のWambuttiはもっとも見栄えの良いものである (Stanley 1890a: 385)。」彼がピグミーを二種類に分けたことは前に述べたが、上記のBatwaにここでのAkkaとWatwaが含まれていて、この両者がWambuttiより下等な存在であると考えている。以下は捕獲したAkkaの女性についての記述である。「サルのような目をした女性は目立つ悪戯っぽい眼球、あごにまで張り出した突出した唇、突出したお腹、狭く平らな胸、なで肩、長い腕、内側に大きく曲がった足、非常に短い脚をしていて、それはダーウィン主義者が考える人間の祖先と標準的な人類の間をつなぐものとして長く求められていたものの特徴にぴったりである。そして極端に下等な、退化した、ほとんど獣のようなタイプの人間として分類されるに値する (Ibid. : 374-375)。」ここではピグミーは人類の進化の途中の段階、動物に近い人間であるとされている。ただし、もう一方のWambuttiに対しては「四肢のどれにもプロポーションにおいて欠陥はなかった。彼女の肌は明るい色で、健康的であった (Ibid. : 375)。」と評価している。

Stanleyはピグミーに対して原始的、動物から人間への進化の途中の段階にあるといったイメージを強烈に持っている。一方で彼に特徴的なのは、近隣の人たちより弱い存在で、圧迫されており、滅びつつある先住民というイメージを持っていないことである。むしろ、ピグミーのほうがまわりの農耕民から農作物を強奪し、農耕民はそれを恐れているという。これは実際に戦った相手としてとても手強かったということが影響しているのだろう。また、単純な物質文化、精神文化、技術などを他の調査者は強調するのだが、Stanleyはあまりそういうことはなく、彼らの矢毒が強力であることを説明するなど逆に優れた技術を持っているという。

Stanleyの探検記はピグミーに関して生き生きとした記述が多いが、一方で、やや感情的もしくは主観的な印象に基づいた記述ともいえる。ただし、これが当時の読者の人気を博した理由だとも思われる。

### (3) Gaetano Casati

イタリア人探検家Casatiは、1879年にアフリカへ出発し、Emin Pashaと一時ともに過ごし、最後は彼とともにインド洋岸にたどり着いた。この10年間のアフリカ滞在中で彼はピグミーと出会っている。ピグミーの分布は、Sandeh (Zande) の南部、Mege、Maigo (Mayogo)、Monfu (Manvu)、Mabodeの人たちの占めている地域である。ピグミーの自称はEfeで、Mambettu (Mangbetu) にはAkka、SandehにはTiki-Tiki、MonfuにはVoshu、MabodeにはAfifiと呼ばれている (Casati, 1891: 156)。またCasatiは川の名前をあげてより具体的に場所を示しているが (*Ibid.* : 95)、そこはIturiの森の北限の近くである。また、Semliki川右岸のAvamba地方の森でピグミーに出会っているが (*Ibid.* : 157)、自称も他称も記述がない。

Casatiはコピトという表現を使っておらず、ピグミー (pigmy) もしくはAkkaを用いている。彼はAkkaをMambettuが使っている名称であるとしながらも、Mambettu以外のところのピグミーにもAkkaを用いている。Schweinfurthの報告でAkkaという名前が広く知られるようになった影響だろう。

Casatiもピグミーの中に違いが存在することを指摘している。小さくて素早く、赤茶色の肌を持ち、毛で厚く覆われて、森に住んでいるのがAkkaで、より背が高く、より濃い色の肌で、より頑健な四肢を持っていて、毛がより少なく、農耕民の近くに住んでいるのがTiki-Tikiであるという (Casati, 1891: 156)。

彼らはゾウ、バッファロー、イノシシ、アンテロープなどを狩猟する。ネズミ、イナゴ、シロアリなども食べる。ゾウは矢で両目を傷つけて視界を利かなくした後で槍で襲うという。小さな動物や鳥は弓矢で狩猟する。網を使った猟は行わない。狩猟の技術は卓越しており、勇敢なゾウのハンターとして、または巧みな弓矢の使い手として評価されている。漁撈活動では小川をせき止めて掻い出し漁を行っている (Casati, 1891: 158-159)。

物質文化では、服は樹皮布もしくは数枚の葉で、装飾品はない。木や土の容器がなく、食物は直接たき火で焼き、手のひらがコップ代わりになる。精神文化では呪術や偶像崇拜、邪視がなく、葬式をしない。技術面では薬を持たず、すばやく火をつける方法がない (Casati, 1891: 157-158)。このように、物質文化や精神面、技術面での単純さを強調している。ただし、一方ではピグミーの部族には長がいて、その長は世襲で継承され、紛争を裁き、狩猟や探検、戦闘を命令するという (*Ibid.*:157)。言語に関しては、ピグミー独自の言語が存在し、地域によって異なっているが、それは他の人たちとの接触によるという (*Ibid.* : 156)。

農耕民との関係については、ピグミーはたくさんの肉を手に入れたとき、彼らはバナナ畑に

行き、肉と交換でバナナを手に入れる (Casati, 1891: 158)。また、ピグミーは、弓矢の巧みさとすばやさ、勇気をもった優秀な兵士として、農耕民によって評価されている。彼らを確認して他の民族との戦いを有利にしようとするために、ピグミーに鎌や食物を与えたりしている (*Ibid.*: 159-160)。一方でMonfuにつかまって奴隷になったピグミーもいる (*Ibid.*: 106)。

彼は、ピグミーはもともと彼らが遊動していた北の地域に農耕民が侵入してきて南のほうへ追い出されたと考えている (*Ibid.*: 95)。つまり、先住民であると想定している。

#### (4) Arthur Jermy Mounteney Jephson

Emin Pasha救助探検隊の一員のJephsonも旅行記を書いており、その中にピグミーが登場する。ピグミーの他称は、MonbuttuではAkka、A-sandaiもしくはNiam-Niam (Zande) ではA-ticky-ticky、Momvu (Manvu) ではVorchow、MabordaiではA-fi-fi、Unyoro (Nyoro、アルバート湖東岸に居住) ではBatwaもしくはWattua (Jephson, 1891: 368-369) である。またIturiの森にいるピグミーをザンジバル人はWambuttiと呼んでいる。

彼はピグミーを指す単語としてコビト (dwarf) を一貫して用いており、ピグミーという単語はみられない。

ピグミーは決して退化した人種ではなく、しっかりとした体型に成長し、均整がとれていて、筋肉が発達しているという (Jephson, 1891: 372)。

ピグミーは、小さなバンドで森の中を遊動生活しており、狩猟の産物と森での採集物で生活し、農耕はほとんど行っていない (Jephson, 1891: 368)。彼らはある場所にしばらく滞在し、獲物がわずかになると別の場所に移動する (*Ibid.*: 371)。

物質文化については、木の枝を曲げて葉で覆った簡単な小屋を作り、料理用の鍋など家事の道具や装飾品を全く持っておらず、服は葉や樹皮、毛皮の切れ端などでしかないという (Jephson, 1891: 371)。

一方、Emin Pashaのキャンプにいるピグミーの女性は勤勉で、よい召使いになるとされる (*Ibid.*: 374)。

言語については、ピグミー独自の言語を持っているが、普段は近隣の農耕民の言語を話している (Jephson, 1891: 373)。

近隣の農耕民との関係では、ピグミーは毛皮や獣肉、象牙などを農耕民に提供し、農耕民からは彼らが必要とする食べ物をもらう。この交換関係が公正に保たれている間は農耕民との良好な関係を維持しているが、もし彼らが交換が公正でないと判断したときには農耕民の報復し、待ち伏せして木の陰から農耕民を射殺して、農耕民の畑のバナナを略奪する。また、ピグミーが現れるとすぐにその農耕民の長は彼らのご機嫌を取り、農作物をプレゼントする (Jephson, 1891: 369; 371)。彼らは勇敢で大胆な人たちで、進んで戦争をし、近隣の人たちから恐れられている (*Ibid.*: 369)。戦争では、彼らは弓と毒矢、小さな槍を使う。鉄の槍の穂先と鎌は、彼らと交易している農耕民が彼らのために作っている (*Ibid.*: 373)。

Jephsonは、ピグミーが、単純な物質文化を持ちながらも、戦闘では強力でまわりの農耕民に恐れられていると述べている。ただし、一般的には赤道アフリカに広がっていた先住民の生き残り、他の人たちの移住によって分散させられた人たちであると考えられているという説明も載せている (Jephson, 1891: 368)。農耕民に恐れられているという話と追いやられたという話は矛盾するようにも思えるが、この点についての説明はない。

## (5) Thomas Heazle Parke

ParkeはEmin Pasha救助探検隊に医師として同行した。彼もその旅行記においてIturiの森のピグミーについて記載している。彼はIturiの森のピグミーをWambuttiと呼んでいる (Parke, 1891: 240)。その一方で彼はピグミーの女性を召使いとして抱えていたのだが、その女性の民族名はMonbuttuであるとし、これまで出てきた農耕民のMonbuttuと区別するために彼女をMonbuttu (dwarf) と記載したりもしている。ピグミーにMonbuttuの名称を当てているのは彼のみで、かなり不自然である。

彼はピグミーを指す単語としてピグミー (pigmy) とコピトを併用しており、ピグミーのほうが多く見られるものの、使用法に違いはない。

彼のピグミー観では、召使いのピグミー女性がとても高い評価をされていることが特徴的である。彼女は奴隷商人から購入され、日常的に彼の世話をするとともに、部隊に食物がない時には彼のために森で食物を採集して彼に提供したり、医者であるParkeの治療の手伝いもしている。「彼女は本当に最も優れた看護師として王立赤十字に値する」(Parke, 1891: 287)という。さらに彼女は海岸への旅の途中で病気で動けなくなってしまったためにおいていくことになるのだが、そのときの彼の悲しみと彼女のすばらしさをParkeは書き綴っている。「彼女はいつも私に献身的で誠実で、暗黒大陸の他の女性とは違い、彼女の道徳心は全く疑いようがなかった」(Ibid.: 464)。Parkeに対する忠実さ、誠実さ、有能さが強調されている。

一方、他のピグミーについての記述は多くなく、一か所にまとめて一般的なピグミーの生活が記述されているだけである。その部分を要約すると、ピグミーは狩猟で生活していて、狩猟方法としては網猟と毒矢を用いる弓矢猟で、落とし穴でゾウを狩猟することもある。農耕民の農作物を頻繁に盗む泥棒で、そのため農耕民とのトラブルが絶えない。Parke自身も自らの食物をピグミーに盗まれないためにパトロールをし、その時にはピグミーから毒矢で攻撃を受けたりもしている (Parke, 1891: 251)。

彼には誠実、忠実、有能な召使いのピグミーと、敵対する泥棒で毒矢で攻撃してくる凶暴なピグミーという二つのピグミー像が共存している。彼は、ピグミーに対して、隣人よりも弱く、滅びつつある人たちというイメージを持っておらず、この点はStanleyに近い。

## (6) Wilhelm Junker

Junkerは1875年にスーダンのハルツームを出発して1886年まで赤道アフリカを探検し、マハディの反乱の中、Emin Pashaと一時ともに過ごし、彼の手紙をもたらしした人物である。彼はMomfú (Manvu) の地域でピグミーと出会った。彼らの自称はAtschúa (複数形Wotschúa) でMomfúにはAffifiと呼ばれている (Junker, 1891: 88)。ただし、彼はBátuaやBatwaと呼ばれる人々とAtschúaは同じで、離れながらも緊密なつながりを持つ部族を形成しているという。

用語については、Junkerはコピト民族 (Zwergvolk) という名称を使っており、ピグミーという単語は出てこない。

彼は、ホッテントット<sup>1)</sup>とは垂れた腹と尻の形態において類似性は見いだせないという。また、Wotschúaが病気で退化した民族ではなく、健康な人たちであることを強調している (Junker, 1891: 88-91)。

生活面では、遊動生活を送り、男性は狩猟に専念している。半球型の小さな小屋を作るのは女性の仕事である。弓矢や槍は他の部族との交換で手に入れ、彼ら自身はそのような武器を作る技術を持っていない。

社会組織の面ではWotschúa自身に長が存在するという (Junker, 1891: 91)。

近隣の農耕民との関係では、彼らが好む農耕民 (Mamfú, Mabóde, Maigó) と反感を抱いている農耕民 (MädjeとMangbattu) がいて、もっぱら彼らが好む農耕民の地域を遊動し、反感を持つ農耕民の地域は避けている。彼らを他の部族は恐れていて、農作物を盗まれても我慢する。例えば、彼らは畑になっているバナナの実に矢を突き刺して、その実が熟したときに彼らがそれを収穫するという権利を主張する。その畑の持ち主の農耕民は彼らからの報復を恐れてその実に触れることはない。農耕民と協調関係を維持している場合はそこにとどまって、農作物、特にバナナを農耕民が提供し、彼らは獣肉を農耕民に提供する。彼らは地域の支配者によって戦いに動員され、奇襲攻撃の時の情報収集に役立っている (Junker, 1891: 91-92)。

#### (7) Franz Stuhlmann

ドイツ人のStuhlmannは1888年に東アフリカを探検し、Emin Pashaの海岸部への旅に同行し、旅行記を出版している。Stuhlmann (1894) の第20章はピグミー民族 (Das Volk der Pygmäen) というタイトルで、40ページにわたってピグミーについて述べられている。その中には古代ギリシャの話や他の探検家のピグミーの記述もあるが、彼自身が観察したり近隣の農耕民から聞いたりしたピグミーの話や、一緒だったEmin Pashaからの情報も含まれている。

彼はピグミーや他の農耕民の言語の収集を積極的に行い、そのリストが旅行記にある。それによると、ピグミーの自称はE-véもしくはBa-ae-vé、他の農耕民による他称は多数あるので一部を紹介すると、MonfúがEféもしくはAfé、Walésse (Lese) がEwéもしくはEfé、Wáwira (Bila) がWambútti、Baira-Wakóndjo (Konzoの1グループ?) がWassúmba、Wanyóro (Nyoro) がWátwaもしくはBátwa、Mangbátu (Mangbetu) がAkkaと呼んでいる (Stuhlmann, 1894: 461)。彼はIturiの森の広い範囲と雪の山Runssóro (Ruwenzori) 山の西の森でピグミーを観察している (*Ibid.* : 463-464)。

彼はIturiの森とSemliki川付近のピグミーをひとまとめに考えており、Stanleyが二つのグループにピグミーを分けたことについて、身体における差は個人的なものに過ぎないのではないかと述べている (Stuhlmann, 1894: 446)。

彼はピグミー (Pygmäen) という名称を中部アフリカの体の小さな人たちに用いることを推奨している。それは、ホメロス、ヘロドトス、アリストテレスがピグミーと呼んだ人たちが彼らであると考えているためである。さらに彼は、コビットという単語がヒトではない別の小さな生き物もしくはヒトとしては異常な小さな人たちを意味し、一方で実際に中部アフリカにいる人たちは体は平均よりは小さくともれっきとしたヒトであるとして、彼らをコビットと呼ぶべきではないと述べている (Stuhlmann, 1894: 436)。

Stuhlmannは身長や肌の色、体型について細かい記載をしている (Stuhlmann, 1894: 440-441; 445)。その中ではブッシュマンとの類似性や差異を議論しており、ブッシュマンとピグミーが同じ起源なのかということに関心があることがうかがえる。彼の結論では類似点もあれば相違点もあり、この問いへの答えは出せないということである。また、Emin Pashaが主張していることであるが、ピグミーには産毛のような細かい短い毛が全身に生えており、それが胎児の産毛にあたるのではないかとし、そして、「彼らは美しくはないが、奇形ではなく、むしろ若い成長段階で止まったままになっている」と述べている (*Ibid.*: 446)。

彼らの性格は、内気、臆病、用心深い、野生の獣のように絶えずびくびくしている、とされながらも、一方で、疑い深く、ずる賢い、突然怒り出す、わがまま、復讐心が旺盛、嘘や盗み

を頻繁に行う、という悪い印象の記述が目立つ (Stuhlmann, 1894: 439-440; 448)。ただし、ザンジバルまで連れてこられてヨーロッパ人の家で家政婦として暮らしているピグミーの女性については、家政婦として十分に役に立っており、まずまずの頭の良さを示し、他の人よりも低級の精神状態にあるわけではないと述べている (*Ibid.* : 448)。

生業活動については、彼らは農耕を全く行っておらず、またイヌ以外の家畜を持っていない (*Ibid.* : 456)。定住地を持たず、野生動物を追って移動して暮らしている。肉だけではなく果物やキノコも採集している。また農作物は農耕民から盗んだり、狩猟の成果と交換して手に入れている (*Ibid.* : 448)。

物質文化については、彼らが原始的であるということを強調している。男性の服としては小さな樹皮布を植物の内皮の繊維を撚ったひもで固定し、女性は腰ひもを身に着けるのみである。その他の装飾品は全くない (*Ibid.* : 442; 450)。また、彼らは木でできた矢と鉄でできた鎌の付いた矢を持っているが、彼ら自身では鉄を鍛造することはできず、近隣の民族から狩猟の獲物と交換で鉄製品を手に入れている (*Ibid.* : 452)。木の矢が彼らの本来のものであるとし、さらに「この木の武器から、ピグミーが未だに原始的な文化段階、「木の時代」の様式にあるということを結論付けることができないだろうか。彼は石の加工の知識なしに直接鉄の道具を用いた生産へと移行したようである。」と述べている (*Ibid.* : 453)。つまり、彼らは石器時代以前の技術の段階から、近隣の農耕民から鉄を手に入れて鉄の道具を使う現在の段階に移行したというのである。彼らをいかに原始的であると考えているかよくわかる。加えて、彼らは木をお互いに擦ることによって火を起こす技術を持っていないとも述べている (*Ibid.* : 451)。

近隣の農耕民との関係では、先に述べたように農耕民の畑から農作物を盗んだりする一方で、肉と農作物や鉄製品を交換している。ピグミーの集団の多くは特定の農耕民の集団と交易や交際を行い、それによってある一定範囲の地域にとどまっているが、一部のピグミーは広い森の中を歩き回っている (Stuhlmann, 1894: 448)。農耕民はピグミーの小さな体格と奇妙な生活を軽蔑しているが (*Ibid.* : 443)、一方で狡猾で執念深い人たちとして恐れてもいる (*Ibid.* : 462)。このように農耕民によるピグミーに対する両義的な関係や評価 (北西, 2010a参照) が描かれている。

彼はピグミーの言語についても、それが農耕民起源なのか、またIturiの森の地域内のピグミーは同じ言語を話しているのか、さらに他の地域のピグミーやブッシュマンと言語における共通点があるのか、を議論している。他の地域のピグミーやブッシュマンとの共通点を見出すことは難しいが、前の二つの問いについては今後さらなるデータが必要だという結論である (Stuhlmann, 1894: 456-460)。

彼は、農耕民の伝承から、ピグミーが以前はより広い分布域を持っていたと考えている。分布域が小さくなった理由は二つで、一つは移住してきた農耕民による圧迫である。もう一つは、森が減少したことで、なぜならピグミーは森でしか生きられないためである (Stuhlmann, 1894: 465-469)。

彼はピグミーについての章のまとめでピグミーの原始人種性 (Urrassentum) について議論している (Stuhlmann, 1894: 471-473)。つまり、ピグミーは原始的 (起源の状態により近いという意味での) な人間であるのかということである。まず彼は、質の良くない食物の不規則な摂取によって成長が止まること、もしくは孤立した集団における近親間での生殖により、普通の黒人が退化することでピグミーが誕生したという仮説について検討している。彼はこの仮説を、ピグミーが奇形ではなく、子供のようにはあるが良い体型をしていることから否定して

いる。二つ目の仮説は密な原生林の生活への生物学的な適応として大きな体格から小さな体格へ進化したというものである。体が小さくなることにより、原生林のツル植物の隙間を這って進むことや獲物に忍び寄ることが容易になり、その結果、生存競争において有利になるという仮説である。しかし、ブッシュマンやアジアのアンダマン諸島の人々などは森に住んでいないにもかかわらず小さな体をしていることから、この仮説は成立しないという。また、アフリカの黒人の下層民もしくは「アウトカースト」として、つまり、彼らはみじめな暮らしぶりによって小さな体になったということもピグミーの均質性から否定している。

彼はピグミーを原始人種Urrasseであると結論づけている。その原始人種は原始時代にアフリカと南部アジアの熱帯地域に住んでいて、かつ、ピグミーと南部アフリカのブッシュマンは別々の二つのタイプに属している可能性がある。また、アフリカの原始人種がアジアから移住してきたのかについては今後の課題であるという。

彼はピグミーについてさらにこう述べている。「ピグミーは狩猟遊動民で、本当に「木の時代」に留まっていて、低レベルの民族学的な発展段階にあり、人に気に入られたいという気持ちや虚栄心に欠けているので装飾品をつけたり入れ墨をすることもない。それにもかかわらず、彼らは教化の見込みのある人たちで、知的才能があり、その点では黒人に類似している。しかし、子供の体型での生活の時代に留まっていて、それは黒人が一生すべてで子供の精神状態に留まり続けているようなものである<sup>3)</sup>。サルとの何らかの類似性はピグミーには見られない。」(Stuhlmann, 1894: 472-473)。

Stuhlmannは、この時期にIturiの森を探検した人たちの中で最も科学的にピグミーについて分析しようとした人で、この点ではStanleyと対照的である。彼の結論は、ピグミーは原始人種で、精神的にも身体的にも子供のような人たちで、低いレベルの発展段階にとどまっている人間とするものである。文化進化論の全盛期において、原始的な人間の状態を明らかにすることに大きな関心が寄せられていたことがわかる。最後に彼は、ピグミーがヨーロッパ人の影響を受けて変わってしまう前に、そして黒人によって滅ぼされてしまう前に、ピグミーについての詳細な情報を収集する必要性を述べている (Stuhlmann, 1894: 473)。

## 2. コンゴ民主共和国の中部を探検したドイツ人を中心とする人たち

### (1) Hermann von Wissmann

ここではKasai川とその支流やTsuapa川、Lomani川流域を調査したドイツ人を中心とする探検家によるピグミーの報告を述べる。

Wissmannは1880～83年と1886～87年の二回にわたってアフリカ大陸を横断しており、それぞれWissmann (1889) とWissmann (1890) にまとめられている。

一回目の探検はPoggeとともに、現在のアンゴラの首都Luandaを出発して大陸を横断しザンジバルまで到達した。その行程でピグミーと何回か出会っている。彼は、Lubi川 (Sankuru川の支流) 流域や、Lubilasch川流域 (Lubilanji川?)、Katende (Lomani川近くにあるLuba王国の村) 付近の森でBatuaと呼ばれるピグミーを観察している。またコンゴ川を越えてタンガニーカ湖へ向かう途中、Luama川流域でもBatuaの村を見ている (Wissmann, 1889)。

Wissmannの二回目のアフリカ横断の旅では、Sankuru川の上流部で村長から、先住民であるピグミーが存在し、Baluba (Luba) はピグミーをBatuaと呼び、彼自身はBabeckiと呼んでいるという話を聞いている (Wissmann, 1890: 44)。また、Lusamboの少し北から東に向けた行軍の途中にBatetela (Tetela) の住んでいる地域で2、3人のBatuaと偶然出会っている (Ibid.:

127)。またBalubaやBassonge (Songe) の住んでいる地域にもBatuaがいるという話を聞いている。コンゴ川からタンガニーカ湖の間の旅程では、森にBatuaがいるという話を聞いているが、彼の一回目の旅でBatuaと出会った村はすでに消滅していた (*Ibid.* : 190)。

まず、用語であるが、Wissmann (1899) では一貫してBatuaを用いており、ピグミーもコビトも用いられていない。一方、Wissmann (1890) ではBatuaが多く、コビト (ZwergもしくはZwergvolk) は使われているが、ピグミーという単語は出てこない。

生活については、彼らは森を遊動し、果実、根茎、キノコ、肉、イモムシ、セミ、シロアリなどを食べている。狩猟の道具は小さくてきゃしゃな弓矢で、矢には毒矢を用いている。獲物はネズミやその他のげっ歯類、コウモリなどが多いが、運が良い時はイノシシやサル、さらに稀にはゾウが獲れる (Wissmann, 1890: 131)。

技術の程度は低く、鉄の武器はナイフだけでその他は木材の武器を使っている。服は着ておらず (*Ibid.* : 135)、装飾品をつけたり化粧をしったりせず、髪を結ってもいない (*Ibid.* : 129)。

ただし、農耕民との身体と比較では好意的な評価が見られる。例えば、「農耕民よりも美しい色をした賢そうな目、黒人とは違った反り返ったバラ色の唇が私の興味を惹く」(Wissmann, 1890: 129) という。ただし、若者と年長者の間の違いは大きく、若者は生き生きとした肌をしていて彼らの滑らかな動きは気持ち良い感じであるが、年長者はぞっとするように醜い。この理由として、不足した栄養と消耗する野蛮な原生林の生活の長さをあげている (*Ibid.* : 130)。

言語については、Batuaから他の民族とは異なっている彼らの単語をいくつか見つけたと述べている (Wissmann, 1890: 129)。

農耕民との関係では、彼はBatuaが先住民で、のちに農耕民がやってきたと推定している (Wissmann, 1889: 89; 135; 210)。農耕民Balubaは先住民Batuaを追い払ったり、絶滅させたようであり、別の農耕民のもとで生き残ったBatuaはそこで混血をしていた (Wissmann, 1890: 126)。また、BatuaはBalubaからは軽蔑されているが、一方で恐ろしい矢毒を持つということで恐れられてもいるという (*Ibid.* : 130)。

Wissmannの探検記にはBatuaとブッシュマンの類似性を強調する記述がいくつかある。「小さな野生児 (Die kleinen Wildlinge) はBatuaで、南部のブッシュマンに似たこの緯度の先住民である」(Wissmann, 1889: 125)、「中部アフリカのブッシュマン」(*Ibid.* : 210)、「すべてにおいて、小さな人たちがこの大陸の南のブッシュマンとの類似性を際立って想起させる」(Wissmann, 1890: 129)。

## (2) Stabsarzt Ludwig Wolf

Wolfは1883～85年にかけてKasai川流域を探検している。彼によると、Sankuru川とKasai川の間南緯5度あたりに自称をBátuaとする人たちがBakúbaという農耕民の住む地域に分散して住んでいるという (Wolf, 1886: 725)。

まず用語であるが、Wolf (1886; 1888) はBátuaという表現を多く使い、時にコビト (Zwerg, Zwergvolk) を用いている。ピグミーという単語は出てこない。

身体的特徴としては、体のプロポーションは通常のヒトのもので、ヒトとサルとの中間のような体つきをしているわけではないと述べている (Wolf, 1886: 727)。

Bátuaの生活は大きく二つに分かれているようだ。一つは森で狩猟をしながらの遊動生活、もう一つは農耕民の長の居所近くで彼のためにヤシ酒と獣肉を提供するという生活である。

後者の仕事を避けるために森の中の小さな集落で暮らしているとも述べている (Wolf, 1886: 726; Wolf, 1888: 259)。後者の生活では、農耕民にかなり同化し、混血も進んでいる (Wolf, 1886: 259)。前者の森での生活では、農耕をおこなわず、ニワトリ以外の家畜を持たず、弓矢と落とし穴を用いて狩猟を行っている。落とし穴は大きいものでは深さ4mにもなり、ゾウやバッファローもしとめる (Wolf, 1886: 726; Wolf, 1888: 262-263)。

社会組織の面では、彼らには長が存在するものの特別な印をつけておらず、家長のような形で付き合っている (Wolf, 1888: 263)。

言語については、Balūba、Bakūba、Bátuaの基本単語のリスト (Wolf, 1886: 733-735) が提示されているが、類似性やピグミー語の存在についての議論はない。単語そのものを見ると似ているものと全く違うものが混在している。

農耕民との間で交換が行われており、Bátuaは獣肉を提供し、農耕民はトウモロコシ、キャッサバ、ラッカセイなどの農作物や鉄製のナイフを与えている。Bátua自身では鉄製品を製作できない。交換は定期的に定められた日に中立の土地の原生林の中で行われ、それ以外での交渉はみられない (Wolf, 1886: 726; Wolf, 1888: 259)。つまり、農耕民に対して従属的で農耕民のために働いており混血が進んでいるBátuaと、農耕民との交渉を最小限に維持しながら森で暮らしているBátuaがいるようである。

Wolfは、農耕民から、彼らがもともとその地に住んでいたBátuaを押しつけて現在の地にいるという話を聞いたことから、Bátuaを先住民であると考え、またSchweinfurthのAkkaとブッシュマン、Bátuaの間には太古から関係があり、それは低身長という共通点によって示されており、時にみられる相違は離れた距離による気候の違いや生活の違いによるものではないかと述べている (Wolf, 1888: 264)。

### (3) Charles Somerville Latrobe Bateman

Batemanはイギリス人だが、1884年にLéopoldville (現在のキンシャサ) でドイツの探検隊に加わり、1885年までWolfとともにKasai河流域を探検している。彼によると、BalubaとBashilangéという農耕民の隣人としてBatua BankonkoとBatua Basinjiという人たちがいる (Bateman, 1889: 23)。またBakubaやBakétéなどの農耕民もBatuaと関係を持っている。彼がピグミーの話をよく聞いた場所はLuebo川 (Kasai川の支流のLulua川のさらに支流) 流域であり、Batua Bankonkoがいた地域であるが、農耕民から聞いた話ばかりで、実際にピグミーに会って話を聞いた様子はない (Bateman, 1889)。

Batemanも用語としてはBatuaを使っており、一度だけコビトが出てくる。

彼のBatuaに関する話は、農耕民がBatuaによって苦しめられているというものがほとんどである。Batuaは農耕民の農作物を奪い、優れた戦士で、勇敢で分別がないという (Bateman, 1889: 23)。彼は強制的に村からBatuaを追い払ったりしており (*Ibid.* : 145)、他の探検家がピグミーに対する好奇心を持っているのに対して、彼は現地の人たちとの取引にしか関心を持っていないようである。Batuaの生活をうかがわせるものでは、彼らがいるところでは象牙を手に入れられるという記述があるにすぎない (*Ibid.* : 85)。

### (4) Curt von François

ドイツの探検隊の一員であるFrançoisは1884年から1885年にTschuapa (Mbandakaでコンゴ川と合流するRuki川の支流のTsuapa) 川とLulongo (Lolong) 川流域を調査している。この

探検の途中で農耕民からこの付近に住んでいるピグミーの情報を得ている (François, 1888)。ただし、彼が実際にピグミーと友好的に出会ったのは一度だけである (弓矢で攻撃されたことは何度かある)。このあたりでピグミーはTschobe, Barumbe, Bapotoという名称で呼ばれている (*Ibid.* : 148)。

Françoisも用語としてはBatuaを使っており、何回かコビトが出てくる。ピグミーは使われていない。

Françoisによると、Batuaはコンゴ盆地南部を中心に広く分布する人たちであるが、彼らだけで暮らしていることは稀で、他の人たちの中に分散している。8家族以上の集団で遊動し、狩猟をしながら生活をしている。落とし穴でゾウやバッファローなどの大きな獲物を捕らえるとともに、槍でも狩猟をする (François, 1888: 158)。

Batuaは戦いに強く、毒矢を用いる。また彼らの身長よりも高い盾を持っている。夜に村を襲い、火を放ち、逃げてくる人たちを弓矢で射る。また戦死者や捕虜を食べるとも言われている (François, 1888: 155; 159)。実際、Françoisも川を船で遡っているときにBatuaから矢を射かけられている。この時は農耕民の長の命令で攻撃をしていたようであり (*Ibid.* : 155-156)、農耕民と強く結びついているBatuaが一部存在する (*Ibid.* : 158)。

言語については、Batuaは近隣の農耕民とは異なった固有の言語を持つという (*Ibid.* : 160)。

Batuaはたくさん肉がとれたときは近くの農耕民の長のところに貢物として持っていき、残りを食料や真鍮の棒、ビーズと交換する。真鍮の棒やビーズは婚資として用いられている (François, 1888: 159)。

### 3. 大西洋岸から入ったフランス人とドイツ人の探検家たち

#### (1) Richard Kund

ドイツの探検隊の一員であるKundは1889年に現在のカメルーンにあたる場所を探検し、Batanga (Kribiから少し南)の海岸の後背地にある森でピグミーを発見した (Kund, 1889: 108-109)。ただし、彼らはすぐに逃げ出し、その退却の姿しかKundは確認していない。彼らは自身のことをBojaeliと呼び、まわりの農耕民からはBaüecと呼ばれている。

まず、用語だが、彼はコビトもピグミーも使っていない。異様に小さな体格の人 (Leute von einem auffällig kleinen Wuchs) といった表現がなされている (Kund, 1889: 108)。彼はBojaeliのことをAkkaやBatuaのようにコビトということはできないと述べている (*Ibid.* : 109)。彼らが体は小さいけれども人間であるということを主張したためだと考えられる。

生活面では、森を遊動し、狩猟によって生活をしていて、仮の屋根しかないようなところで寝ている。狩猟では銃も稀に使うが、槍でゾウを殺すことを好んでいる (Kund, 1888: 109)。

農耕民との関係では、彼らはまわりの農耕民を怖がっていて、稀にしか農耕民の村に現れない。まわりの農耕民からはとても低い地位の存在として軽蔑されている。農耕民の村にやってくる時は、狩猟で得た獣肉を銃や火薬と交換するのが目的であるという (Kund, 1888: 108)。すでにこの時点でピグミーに銃が導入されていることには驚かされる。

Kundは、Bojaeliが農耕民よりも前にこの地に住んでいた先住民であるということを主張している (Kund, 1888: 109)。根拠は示されていないが、多分、農耕民から聞いた話に基づいているのだろう。

## (2) Paul Crampel

フランス人のCrampelは1890年に北緯2度東経13度のあたりのM'Fang (Fang) が住んでいる地域でBayagaというピグミーを発見した (Crampel, 1890: 548)。彼はM'Fangに連れられてBayagaのキャンプを訪れている。CrampelはBayagaを直接観察し、話も聞いている。

Crampelはピグミーもしくはコビトという用語を一度ずつ用いているが、その使い方は慎重である。「BayagaはM'Fangと比べるとコビトnainで」 (Crampel, 1890: 552) ということで農耕民より体の小さな人たちという表現でnainを使い、「現在興味を持たれている《ピグミー》」 (Ibid. : 553) というようにカッコつきでしかも自分自身で呼ぶのではなく一般的にそう呼ばれているという意味で用いている。彼自身の用語としては「小さな人たち (petits hommes)」 (論文のタイトル)、「アフリカ全体に広がっている小さな人種 (la petite race d'hommes répandue dans toute l'Afrique)」 (Ibid. : 548) というので、体は小さいけれども普通の人間であることを強調したものになっている。一方でStanleyのOumbouttis (Wambuttiのこと) などとははっきりと同系統の人たちであるといい、中部アフリカの体の小さな狩猟採集民が同じ人たちであると考えている (Ibid. : 548)。

生活面では、彼らだけで暮らしているときは固定的な住居を持たずに森で遊動生活を送り、狩りをしながら生活をしている。畑は持っていない。一方で、近隣の農耕民とともに暮らすこともある (Ibid. : 549; 551)。子供たちは小動物を罠で獲り、女性はハチの巣を探す。男性は弓でサルやアンテロープを狩るが、本当のBayagaの狩猟はゾウ狩りである (Ibid. : 550)。小屋は細い棒を碁盤目状に編んだ骨組みを葉で覆ったもので、ベッドは大量の柔らかい葉である。道具はわずかしがなく、鉄のトンカチ、樹皮を叩いて布にする象牙の杵、槍、弓矢などで、まれに小さな太鼓がある。槍の穂先は古い銃の砲身の鉄から作られる (Ibid. : 549)。

言語については、Bayagaの特有の言語はM'Fangなどの他の民族には理解できないと述べている (Crampel, 1890: 553)。

Bayagaの結婚制度についても記載があり、それによると、一夫多妻は認められているもののほとんどは一夫一妻で、結婚当初は妻方に居住し、ゾウ狩りやハチミツ採集をしてその成果を妻の親族に提供する。この結婚で生まれた息子がゾウ狩りに成功すると、男性は妻を連れて自身の生まれたキャンプに戻ることができる (Crampel, 1890: 553)。性格面では、農耕民を恐れていて、スタンレーがWambuttiと戦ったようなことはBayagaでは起きそうもなく、彼らには戦う勇気はなくて、せいぜい防戦するか落伍者を襲う程度だろうという (Ibid. : 553)。

BayagaとM'Fangの関係は、半服従状態、劣位な状態、半依存状態にあるとされる。また報酬のために働く人とパトロンの関係であるともいう。Bayaga以外の人たちはBayagaを未開とみなしている。ただし、ときには神秘的であるとも受け止められている。Bayagaの男たちは順番に半分ずつ (一つのキャンプに男性が15人くらいいる) 狩りに行く。ゾウが殺されるとM'Fangの長に連絡し、彼は妻たちにキャッサバとバナナをそこに持っていかせ、物々交換が行われる。大きな獲物が倒された場合には、布の切れ端、壊れた銃、すり減った鉄の斧が与えられ、さらに大きな獲物の場合にはさほど壊れていない銃が与えられる。ただし、その交換の現場を見たCrampelはあまりのM'Fangの横暴さに驚いている。それは次のようだった。「小さな象牙を持ってやってきたBayagaをM'Fangは大きな叫び声で出迎え、彼らを乱暴に押し叩いたりして、彼らから象牙をもぎ取り、彼らに剥げ落ちたビーズ、壊れて使えない銃を投げつけた」 (Crampel, 1890: 550)。

M'Fangは、Bayagaに対してこのような扱いをする理由をCrampelに説明している。「Bayaga

が鉄製の槍を持っていないときはハチミツや森の果実しか食べるものがなかった。Bayagaの父が空腹のとき、彼は子供たちに命令してゾウ狩りに行かせた。しかし、ゾウはあまりにも強かった。その時、M'Fangの父はBayagaを憐れんで、古い銃を彼らに提供した。Bayagaはその鉄をもとに槍を作り、ゾウを倒すことができるようになった。だから、BayagaはM'Fangのためにゾウを殺す。」(Crampel, 1890: 550)。つまり、M'FangはBayagaが自身では手に入れることのできない鉄を与えることによって優位に立っている。また、「M'Fangの父」という言葉があることから、BayagaとM'Fangの間に擬制的親子関係が存在することが推定される。

ただし、CrampelはBayagaがM'Fangによって完全に自由が奪われているとは考えていない。M'Fangの長のための狩猟の義務を彼らは自発的に受け入れており、長があまりにも頻繁にだました場合やひどい虐待をしたときは、彼らはその土地を去る。そして新しい保護者を見つける。そのため普段、彼らは十分に仲良く暮らしている。Bayagaが狩りに疲れたときは農耕民の村近くにやってきて、農耕民からキャッサバやバナナをもらって食べるという (Crampel, 1890: 552)。

### (3) Jean Dybowski

フランス人のDybowskiについてはDybowski (1894a) と (1894b) の二つの論文があり、前者はDybowskiがパリの人類学会でピグミーの写真を発表したときの議論で、後者はDybowski自身の報告である。Dybowskiは現在のガボンのMayoumbaのあたり (Dybowski, 1894a) と Sette-Camaのあたり (Dybowski, 1894b) でピグミーと出会っている。観察年が不明であるが、これらは観察直後の論文であるので、1893年か94年初めに観察していると思われる。彼が出会ったピグミーは内陸部から来た奴隷で、ObongoもしくはOkoaと呼ばれていた。Dybowskiは身体計測をしたり写真を撮影したりしている。また彼はOubangui (Ubangi) 川の上流 (どのあたりかは不明) の地域に行ったとき、現地人がピグミーの話を彼にしたが、彼らと出会うことはできなかったと述べている (Dybowski, 1894b: 307)。

用語については、Dybowskiはピグミー (pygmées) とコピト (nain) を普通に使っており、ObongoをSchweinfurthのAkkaと同じピグミーの一員と考えている (Dybowski, 1894b: 505)。

彼が海岸部で出会ったObongoは、白人の基地に野生の動物を供給していた。彼らはより強力な隣人によって攻撃されて、従属の状態に追い込まれ、それによって奴隷となっている。また、他の民族から劣った人種であると考えられている。また、Dybowskiには彼らが消え去る運命にある人種に属しているように見えたという (Dybowski, 1894b: 507)。

### (4) François Joseph Clozel

フランス人のClozelはOubangui川の支流のSangha川の流域を探検している。探検をした年は報告に記載されていないが、報告が発表された1895年もしくはその前年の94年だろう。彼は中流の左岸の村BayangaでBabingaと呼ばれるピグミーの頭蓋骨と骨盤を収集している。彼はBabingaをSangha川流域におけるコピトの代表であると述べている (Clozel, 1895)。彼らの生活に関する記述は全くない。

### (5) Rudolf Virchow

Virchow (1899) には、1898年にドイツの帝国防衛部隊がカメルーンで収集した情報が記載されている。その情報とは、Bagelliという民族名のコピトの女性の詳細な身体の質的特徴およ

び身体計測の結果である。報告の最後にドイツの人類学者Virchowの解説が記されている。

調査地はカメルーンとしか記されていないが、現在のBagyeliであると思われるので、カメルーン南部の海岸近くだろう。用語についてはコビトという表現 (Bagelli-Zwerg、Zwerggrasse、Bagelli-Zwergstamm、Zwergvolk) を用いており、ピグミーは使っていない。生活については、リストの中の職業欄の狩猟とゴムの採集という情報のみである (Virchow, 1899: 531; 534)。すでにヨーロッパ人のためのゴム採集がピグミーにも及んでいることがわかる。

Virchowの解説では、Bagelliの身体的特徴が中部アフリカのコビト民族と一致しており、アフリカの中部に同じ系統のメンバーが広がっているという推定は十分に証明されたと述べられている (Virchow, 1899: 535)。

#### 4. 考察

##### (1) 1880～90年代のピグミーの発見

1869年のSchweinfurthによるAkkaの発見や彼に続いたMianiがヨーロッパにAkkaの男性二人を連れ帰ったことなどから、ピグミーの存在は確かなものとなった。ただし、彼らの分布域や生活様式についての情報は、70年代まではわずかであった。Schweinfurthは彼が到達したMombutto (Mangbetu) の地域から南南西の方角にたくさんのピグミーが住んでいるという話を聞いているが (Schweinfurth, 1874: 83; 127)、そこからの情報が得られるのは、Emin Pashaおよび彼の救助探検隊の人たちによってであり、彼らの探検記の出版は1890年前後である。コンゴ川の支流であるKasai川やTsuapa川流域におけるピグミーの存在は全く知られていなかった (コンゴ川水系の全体像そのものがわかっていなかったのだが)。

1880～90年代の発見をもとに、当時ヨーロッパ人に知られていたピグミーの分布をまとめてみよう。まず、広範囲に広がっていると想定されているのがIturi川の付近、現在ではIturiの森と呼ばれる場所である。Emin Pasha救援隊によって広く知られるようになり、現在に至るまでSchebesta、Turnbull、多くの日本人研究者などによってピグミー研究が盛んに行われている地域である。この時期に収集されたWambuttiやEfeといった名称は、現在研究者に使われているMbuti (複数形はBambuti) やEfeに通じる。

アルバート湖とエドワード湖をつなぐSemliki川流域の森にもWatwaもしくはBatwaと呼ばれるピグミーが存在する。WambuttiやEfeと同一の人たちとするかどうかは調査者によって異なっている。

コンゴ民主共和国中央部では、Kasai川とSankuru川およびその支流の広い範囲、Tsuapa川付近、Lomani川上流部でBatuaと呼ばれる人たちがドイツ人探検家によって確認された。また、場所はかなり離れるが、タンガニーカ湖西岸でもBatuaを見つけている。

西では、現在のガボンやカメルーンの大西洋岸部に加えて、内陸部でもピグミーが発見され、また骨だけの報告ではあるが現在の中央アフリカ共和国のSangha川流域でもピグミーの存在が確認された。これらは現在のBabongo、Bagyeli、Aka、Bakaにあたる。

このように西から東の中部アフリカ熱帯雨林地域全体に点々と時には密にピグミーの存在が確認され、現在知られているピグミーの多くが登場している。点々とした分布は、彼らがこの地域の先住民であり、のちに移住してきた人たちによって追いやられたり、滅ぼされたりしたという仮説を強化することになる。さらに南のほうにも分布が確認されたことは、ブッシュマンとの類似性や連続性を考える材料ともなった<sup>4)</sup>。

## (2) ピグミー？コビト？

北西（2011）では1860～70年代においてピグミーやコビトといった用語がどのように使われているかを検討した。それによると、探検者の間ではコビトが普通に使われており、ピグミーを使うのはSchweinfurthなど古代ギリシャのナイル川源流域に住む伝説上のコビトと中部アフリカの体の小さな人々を結びつきを強調した人たちだけだった。一方で、1870年代後半の包括的な研究ではピグミーという用語は中部アフリカの森のコビトたちの総称として使われている。

1880～90年代についてみていこう。Ituriの森のピグミーについて記述している人の多くはピグミーとコビトという用語を区別せずに使っている。JephsonやJunkerのようにピグミーという用語を使っていない人もいるが、一方でStuhlmannのようにコビトは正常な人間ではないという印象を与えるのでピグミーという用語のほうが好ましいという人も現れている。

コンゴ民主共和国中央部のドイツ人はBatuaという民族名を最も多く使い、ピグミーの使用は稀で、コビトの使用はときどきみられる。ナイル川源流域から離れていることから古代ギリシャ以来のピグミーという用語を避けたのかもしれない。西のピグミーでもドイツ人探検家はピグミーという用語を使っておらず、コビトが用いられている。1870年代後半にドイツを代表する人類学者Hartmannが総称としてピグミーという単語を使っていることからすると奇異にも思えるが、まだHartmannの研究が探検家に浸透していなかった可能性がある。

フランス人では、Dybowskiがピグミーとコビトの両方の用語を普通に用いている。彼は探検家ではなく本国にいた人類学者であり、HamyやQuatrefagesの研究を熟知しており、彼らの用語に合わせたのだろう。一方、探検家であるCrampelはピグミーもコビトも制限つきで使っており、小さいけれども普通のヒトであるということを強調している。

まとめると、この時期ではIturiの探検家はピグミーもコビトも用いている人が多く、古代ギリシャの話とのつながりを意識している。一方、それ以外のドイツとフランスの探検家は、本国の人類学者のピグミーという語の使用にもかかわらず、ピグミーという用語を使おうとしない。やはり、ピグミーという単語には依然として伝説のコビトというニュアンスが存在し、実際に会って現実の人間と捉えた探検家はその単語を使いにくいのだろう。Stuhlmannはコビトではなくピグミーという単語を使うべきだとしているが、彼の本の3ページにわたるピグミーに関する文献リスト（Stuhlmann, 1894: 473-475）からわかるように、彼はピグミー研究のドイツ語文献を読み漁っており、その影響があると思われる。ピグミーという名称が現実の人間としてのニュアンスを一般に持つにはまだ至っていないのだろう。また、コビトという用語についても批判が出始めており、その使用を避ける人もいるが、問題視していない人も多い。

## (3) ピグミーの生活

北西（2011）では1860～70年代の発見に基づいて当時のピグミーの生活を再構成しようとはしなかった。それはあまりにも資料が少なかったためである。ある程度の記述があるのはDu Chaillu（1867）とLenz（1878）に限られ、両者とも場所はガボンの内陸部である。

1880～90年代にはある程度の量と質の文献が存在し、おおまかな地域間の比較も可能になった。ただし、これらの文献を読む場合には、記述が純粹に事実を表していると考えべきではなく、調査者の先入観や近隣の農耕民の考え方に基づいて話が構成されている可能性を考慮に入れなければいけない。

具体的な生活を見ていこう。まず彼らの特徴としてあげられているのは、森で野生動植物を利用しながら遊動生活をしていることである。獲物が少なくなると動物を追って移動する (Jephson, Stuhlmann)。とはいえ、森で孤立して暮らしているわけではなく、農耕民と何らかの関係を持っている。Wolfの例では、森で遊動するBatuaに加えて、農耕民の長の居所近くでヤシ酒と獣肉を提供するという仕事に従事しているBatuaもいる。SchweinfurthがMonbuttooのMunza王のもとで出会ったAkkaも王に従属した生活を送っている (Schweinfurth, 1874: 128)。

集団サイズの記述は多くないが、Stanleyの8～12の集団で2000～2500人が大きな畑のまわりに住んでいるという記述は、全体としても個々の集団としても現在のピグミーの集団と比較すると人数が多すぎる。場所は全く違うが、Du Chailluの観察したObongoのキャンプには10～12の小屋があり (Du Chaillu, 1867: 315)、Françoisの観察したBatuaのキャンプは8家族以上からなっており、キャンプサイズは100人を越えていない。Stanleyの記述が誇張ではなく事実とするなら、この時期に奴隷狩りがIturiの森で盛んに行われており、ピグミーもその対象となっていて、それに軍事的に対抗するために大きな集団を形成していたと思われる。Stanleyがピグミーと戦闘をすることになったのも、ピグミーがStanleyらを奴隷狩りにやってきたとみなしたから、もしくは外部者に対して極度の不信感を抱いていたからだろう。

ピグミーは作物の栽培や家畜の飼養をせず (狩猟用のイヌは除く)、狩猟採集と農耕民の畑の農作物によって生活しているということは共通している。現在では農耕を行っているピグミーも多いが (北西, 2002)、当時は農耕化は進んでいないようである。狩猟方法では毒矢を用いた弓矢猟と罟、特に落とし穴が広く見られる。落とし穴は現在ではほとんど用いられていないが、当時はゾウやバッファローなどの大型動物の狩猟に用いられていたようだ。現在では銃に取って代わられたということだろう。また跳ね罟の記述がほとんどないが、鉄製のワイヤーが存在しなければ中型以上の動物をとらえるのが難しいためと思われる。Ituriの森では場所によって網猟が行われているところ (Parke) と行っていないところ (Casati) があり、網猟主体のピグミーと弓矢猟主体のピグミーという分化がすでにあったことがわかる (Harako, 1976 参照)。カメルーンの海岸近くのBojaeli (多分Bagyeli) や現在のガボンとカメルーンの国境近くのBayaga (多分Baka) はすでに狩猟で銃を用いており、主にゾウ狩りに使っている。大西洋岸近くのほうがヨーロッパの影響を早くから受けているようである。野生植物の採集の記述は極端に少ない。採集は狩猟ほど派手ではないことや産物が農耕民と交換されていないことから、調査者に注目されなかった可能性が高いが、調査者が観察したのは農耕民の村からさほど離れていないところであると思われるので、植物性食物は農作物に頼っていたのかもしれない。カメルーン南部の海岸部のBagelliがゴムの採集をしているという記述があり (Virchow)、これもこの地域でのヨーロッパの強い影響を示唆している。

物質文化については、半球型に枝を組み合わせて大きな葉を葺いた小屋をほとんどの調査者が記載している。この小屋は遊動生活と対応している。衣服については、樹皮布や葉、農耕民からもらった布の切れ端、もしくは裸といったようにとても簡素であることが強調されている。また、装飾品をつけない、化粧をしない、鍋などの家事の道具は持っておらず、彼ら自身で鉄の道具を作ることができないということは多くの調査者が指摘している。火を起こす技術を持っていないともいう (Stuhlmann)。Jephsonの「人間が可能な限り未開になれるくらいに未開である (Jephson, 1891: 374)」という言葉や、Stuhlmannの彼らの技術の段階は「石器の段階」以前の「木の段階」にあるという主張がピグミーの物質文化に対する評価である。

宗教や儀礼についての記載はほとんどない。わずかにあるのは、1870年代にLenzのAbongoについて自身の宗教はなく、近隣の民族のお守りをつけたり、儀礼に参加するという記述(Lenz, 1878: 110)や、Casatiの呪術や偶像崇拜、邪視はなく、葬式をしないという記述のみで、ピグミーは自身の宗教を持っていないと考えられている。

社会組織の面ではIturiのピグミーで集団に長がいるという話がある(Stanley, Casati, Junker)。他の地域ではWolfがBatuaに長が存在すると述べているが、家長のように付き合うということで、極端な上下関係は存在しないようである。現在のピグミーでは集団の長は存在するものの強い権力を持っているわけではないとされることが多く、Wolfの話に近い。Ituriのピグミーでは戦闘のために明確な長が存在したのだろうか。

#### (4) ピグミーの言語

ピグミーの言語については、彼ら独自の言語を持っているという調査者が多い。とはいえ、彼らの使っている言語には近隣の農耕民の単語が多数混ざっていることも確認されている。ピグミーの言語が農耕民起源なのか独自のものなのか、またもしピグミー独自の言語があるとしたらそれはピグミー全体で共通しているのかという問いを明確に立てて答えようとしているのはStuhlmannである。彼の結論は、その時点のデータではピグミー独自の言語の存在の有無について答えを出すのが難しい、またもしピグミー独自の言語が存在するとしてもIturiのピグミーと他の地域のピグミーやブッシュマンの言語に共通点はみられないということである。このころからピグミー語が問題となっている。

もしピグミーが独自の言語を持たないとしたら、それは他の人たちとは違って特別の意味があった。他の人たちの場合はまわりの言語を受け入れて言語が変わってしまったというだけのことだが、ピグミーの場合は身体的特徴がまわりの人たちと違うことから長い間孤立していたと当時は想定されており、独自の言語を持たないということは、もともと言語を持っていなかった可能性があることになる。つまり、ピグミーは言語を話すことそのものを他の人たちから導入したということになり、そのくらい原始的だったという仮説となる。もう一つの仮説はより大きな黒人から分かれた「下層民」というもので、身体的な差異が後から生じたということである。ピグミーの言語に関する議論はこれから現在に至るまで続いていくことになる。

#### (5) 農耕民との関係

##### (i) 物やサービスのやり取り

近隣の農耕民との関係については多くの調査者が述べている。多くの場合、調査者は近隣の農耕民を介してピグミーと接触しているので、これについては最も観察や話を聞くのが容易だったと思われる。少なくとも農耕民から完全に孤立したピグミーの話は出てこない。

ほぼすべての調査者が、ピグミーが獣肉を農耕民に提供しているという。獣肉以外では毛皮や象牙などもよく見られる。1860～70年代のガボンにおけるDu ChailluやLenzの調査では魚(魚毒漁や掻い出し漁による)も提供されている。交換に対する見返りとしてすべてに共通しているのは農作物で、鉄製品(ナイフ、鋏、槍の穂先など)も多く見られる。他にはタバコ(Stanley)、布や服(Du Chaillu, Crampel)などがある。Françoisによると、農耕民がBatuaに真鍮の棒やビーズを与えており、Crampelの話ではかなり大きな獲物の場合には銃を与えている。Crampelの調査地は大西洋岸から近く、Françoisの調査地はコンゴ川本流から近いことから、ヨーロッパの商品が他のピグミーの分布域に比べて手に入りやすかったと考えられる。農作物や鉄製品と

いった共通する部分も大きいですが、ヨーロッパの経済への巻きこまれ方の度合いにおいてこの時点で地域差が存在することがわかり、それ以降のピグミーの経済や農耕民との関係にも影響を与えると想定される。

また、ピグミーが農耕民の農作物を盗むという記述は特にIturiの森のピグミーで顕著である。農耕民側もピグミーを恐れて盗みを我慢しているという（Jephson、Junkerなど）。コンゴ民主共和国中部のBatuaではBatemanにそのような記述があるが、他には見られず、大西洋岸のピグミーではDu Chailluが盗みの記述をしているが他にはない。ただし、これを盗みと考えているのはあくまでも農耕民の立場からであり、ピグミー自身がどう考えているかは不明である。ピグミー側は農作物を手に入れて当然と考えていた可能性は大いにある（北西、2010a:36参照）。

ピグミーによる農耕民へのサービスとして記載されているものに、戦士の役割がある。これはIturiの森では頻繁に見られるようで、戦闘や偵察に貢献しているという記述が多くある。コンゴ民主共和国中部のBatuaではFrançoisだけが記述していて、あまり多くはないのかもしれない。大西洋岸では戦士の役割は出てこず、地域差があるようだ。

また、現在ではピグミーの農耕民に対するサービスの中で最も重要なものは農作業の手伝いであるが、これについての記述が全くない。実際には存在したが記述されていないだけなのか、本当に存在しなかったのかは何とも言えないが、もし農作業の手伝いを行っていなかったとしたら、農耕民とピグミーの間の接触は20世紀後半以降に比べてかなり少なかったと思われる。Wolfは、Batuaの一部では獣肉と農作物や鉄製品との交換だけを行い、それ以外では交渉は行わないという。いつごろから農耕民との接触が増えていくのか、さらにその原因は何なのかは今後の課題である。

## (ii) 特定の農耕民とピグミーの関係

多くの地域で特定の農耕民（の集団）と特定のピグミー（の集団）の間に何らかの固定的な関係がみられることも共通している。Ituriの森では両者の集団間で交易を維持し、協調関係が保たれていることがあるという（Junker、Stuhlmann）。Ituriの森やBatuaでは特定の農耕民とピグミーが団結して戦闘をおこなったり（Stanley）、農耕民の長に動員されてピグミーが戦闘に参加している（Junker、François）。また、Crampelにはピグミーと農耕民の間に擬制的親子関係の存在を示唆する記述がある。ただし、これは農耕民から見た関係である。ピグミーが特定の農耕民との関係を違うように考えていた可能性はある（北西、2010a: 39-42参照）。

## (iii) 農耕民のピグミーに対する評価

ここでは農耕民のピグミーに対する評価について述べるが、ピグミーの農耕民に対する評価については情報が少ない。ピグミーの情報は農耕民から手に入れたものが多く、直接ピグミーと会ったとしても農耕民を通訳としてピグミーと話をしていると思像されるので、ピグミーが農耕民の悪口を話さないだろうし、農耕民も自分に都合の悪いことを通訳しないだろう。

Ituriの森では農耕民はピグミーを恐れている。毒矢による報復攻撃は現実的なものとして語られ、農耕民はピグミーのご機嫌を取ったり、盗みを我慢したりしている。一方でStuhlmannは農耕民がピグミーの小さな体を軽蔑しているともいう。Batuaでも農耕民は毒矢による攻撃を恐れているが、軽蔑もしており（Wissmann）、Wolfは農耕民のもとで従順に仕事をこなすBatuaが存在することも指摘している。大西洋岸はかなり様子が異なる。農耕民がピグミーを恐れている様子はなく、逆にピグミーが農耕民を恐れて農耕民の村に立ち寄りとうはしない

ようだ (Kund、Crampel)。Kundは農耕民がピグミーを軽蔑していると述べ、Crampelは、Bayagaと農耕民との関係との間に激しい上下関係が存在することを交換の状況を通して示している。この上下関係は農耕民の説明では鉄の一方的な贈与により成立しており、これは一般的にピグミーと農耕民の間の上下関係の原因の一つとされる (北西, 2010a: 34)。私が調査したコンゴ共和国北部におけるAkaと農耕民の間でも、農耕民からの一方的な贈与によって上下関係が成立すると農耕民が説明することがある。また、農耕民によってピグミーが完全に支配されているわけではなく、あまりにも農耕民が理不尽なことをする場合には、その村から去り、別の農耕民と関係を持つという対抗手段があるので、農耕民もあまり極端なことではできないという点も、CrampelのBayagaとAkaで同じである (北西, 2010a: 36)。

ピグミーが戦闘的であるかどうかと農耕民との上下関係はある程度関連しているようである。Ituriの森ではピグミーは戦闘的で農耕民はピグミーを恐れており、大西洋岸ではピグミーは全く戦闘的ではなく (Crampel)、ピグミーが農耕民を恐れ、農耕民が社会的にかなり上位に立ち、Batuaはその中間のようである。

このような地域差が生まれた原因は、憶測ではあるが、奴隷狩りに対する地域住民の対応にあるのかもしれない。Ituriの森では、地域の農耕民がピグミーを奴隷として奴隷商人に売ることがないわけではないが (Casati)、農耕民も奴隷狩りの対象であることが多く、ピグミーと協力して奴隷商人に対抗していたようである。大西洋岸の場合、強力な農耕民 (ここに出てきた農耕民ではM'Fang) が他の弱い農耕民やピグミーを奴隷狩りしていた。LenzはAbongoが近隣の農耕民から奴隷狩りにあっている様子を目撃し、内陸から海岸部に連れてこられた奴隷の中にはピグミーも混ざっており (Dybowski, 1860年代から70年代ではFleuriot de Langle(1876)、Bastian (1874) など)、強力な農耕民の侵入によって弱い農耕民やピグミーが逃げ出したり滅ぼされたりしていること (Touchard, 1861; Marche, 1879) が報告されている。

ただし、農耕民のピグミーに対する評価は単純なものではない。Crampelは上下関係が大きく原始的とみなされつつも、時には神秘的な存在ともみられているという。このような相矛盾する感情を農耕民が抱いているということは、現在の農耕民とピグミーの間でも指摘されている (北西, 2010a)。

このようにピグミーと農耕民の関係には共通点と相違点が存在し、それは現在でも同様である (北西, 2010a)。その理由については本稿では触れる程度にしか議論していないが、今後さらに議論を深め、現在につながっていく道筋を明らかにする必要があるだろう。

#### (6) 先住民・他の体の小さな人たちとの関係・人類進化上の位置づけ

ここでは調査者のピグミー観として、ピグミーが先住民かどうか、他の地域の体の小さな人たちとの関係をどう考えているか、原始的な存在かどうかもしくは人類進化上のどこに位置づけられるか、を取り上げる。これらの問いはすべて結びついているのだが、それをはっきりと意識して議論しているのは、本稿で取り上げた中ではStuhlmannだけである。

1860～70年代のピグミーに関する議論では、ピグミーは先住民であり、あとからやってきた人たちによって追いやられたり部分的に絶滅するなどして、点々と分散して存在するようになったと考えられていた (北西, 2011: 68)。この考え方は1880～90年代でも変化していない。この論文で取り上げた調査者のほとんどがそのように考えている。例外はStanleyとParkeで、彼らは、ピグミーは高い戦闘能力を持っているので、農耕民に滅ぼされつつある状況ではないと考えていたようである。ただし、彼らは追いやられているわけではないと述べているだけで、

ピグミーが先住民であることを否定しているわけではない。

1860～70年代にはブッシュマンとピグミーの関係についての議論があったが、この議論も1880～90年代の調査者によって取り上げられている。StanleyはAkka, Wambutti, Watwa, ブッシュマンを森の原始的な人種としてひとまとめにし、WissmannはBatuaを中部アフリカのブッシュマンと呼んだりしている一方で、Junkerは身体的特徴で類似していない部分があると述べている。Stuhlmannはデータが足りないので結論は出せないという。この議論は現在でも引き継がれており、DNAの比較を通してサンやピグミーと他のアフリカの人たちとの遺伝的な距離の検証をしている論文や（例えばTishkoff, et al., 2009）、両者の音楽を比較した論文（Grauer, 2009）が存在する。また、本稿では紙幅の関係上取り上げなかったが、1880年代後半にピグミーについての包括的な著作を出版したQuatrefagesは、世界全体の体の小さな狩猟採集民が同一起源であり、インド南部から西と東へ広がって先住民となり、その後体の大きな人たちがやってきて彼らを追いやり部分的に滅ぼしたりするなどして、点々と分散して存在するようになったという仮説を提出している（Quatrefages, 1887）。Stuhlmannはその仮説を意識してアジアの体の小さな狩猟採集民との関係を議論していると思われる。

ピグミーを人類進化上でどこに位置づけるのかという問題はピグミー発見の当初からあり、サルとヒトの中間的な存在なのかヒトなのか議論された。Schweinfurthの発見したAkkaがサルの特徴を持っているのではないかと疑われたこともあったが、ヨーロッパに連れてこられたAkkaの観察などにより、当時の人類学者はピグミーは明らかにヒトであり、サルとは違くと結論付けた。しかし、ピグミーをヒトとサルとの中間的存在とみなす考え方は容易にはならなかった（北西, 2011）。Stanleyの「ダーウィン主義者が考える人間の祖先と標準的な人間の間をつなぐもの」という記述にその考え方が現れている。当時この地域の探検家として人気のあったStanleyの考え方は一般大衆に広まったのではないかと思われ、また一般大衆が喜びそうな考え方でもある<sup>5)</sup>。Stuhlmannは、ピグミーは明らかにヒトであると主張しているが、彼の学術的な文章を一般の人たちが読んだとは思えない。

ただし、そのStuhlmannもピグミーを原始的な存在であるとみなしている点では違いはない。他の調査者たちもピグミーの単純な物質文化を強調して記述している。Stuhlmannの場合は、特に彼らを石器時代以前の木の時代の段階にあると述べており、現在の知見からすると荒唐無稽である。彼らが石器を使っていなかったのは鉄があったためで、彼らが用いている斧の形を見ても、鉄が導入される以前に石器を使っていたことは容易に想像できる。彼にはどうしてもピグミーを初期の人類であると結論付けたいという思いがあったように見える。それはピグミーの研究によって人類の歴史を明らかにしたいということなのかもしれない。私は現存する狩猟採集民の生活に農耕の発明以前の人間の生活の再構成のヒントとなる点があると考えているが、現在の狩猟採集民と農耕の発明以前の人間を同一視することは避ける必要があり、それはカラハリ論争などでも明らかである。本稿で取り上げた時代には、単純な同一視が全く疑問を感じることもなくなされていたのである。

ピグミーに対する肯定的な評価は、特にIturiの森で調査した人たちの間で散見される。Stanley, Jephson, Parke, Stuhlmannは彼らのもつて働いている召使いのピグミーを忠実に勤勉であるとし、またStanleyは高い矢毒の技術について述べている。ただし、この評価はいわゆる「高貴な野蛮人」ではない。あくまでもヨーロッパ人の基準に合わせて文明化（教化）の可能性のある人として評価しており、ヨーロッパ人の鏡像としてのピグミーを称賛しているわけではない。Ituriの森のピグミーでこのような評価が見られるのは、調査者が彼らの戦闘力の

高さを感じる一方で、農耕民に対する従属的な関係を強く感じなかったためかもしれない。

## おわりに

1860～70年代に比べると、1880～90年代では、調査者がピグミーの居住地で彼らの生活を観察する機会が増えており、具体的な民族誌的記述もみられるようになってきた。現在の知見と比較してみよう。現在ピグミーの農耕化が進んでいるが、この時点では農耕化はみられず、現在よりも狩猟採集に基づいた遊動生活の傾向が強いようである。特定の農耕民とピグミーの間の関係が広い範囲でみられ、これは現在にも通じるものであるが、農耕民との社会的距離が現在よりも遠いかもしれない。擬制的親族関係は少なくとも一部で存在するようだ。また、農耕民との力関係がこの時点ですでに地域ごとに異なっているということも見てとれる。商品経済の浸透は当然現在のほうが大きい、それでもこの時点で一部の地域では銃が導入されたり、ゴムの採集を行ったりして、地域差が大きい。このように、現在のピグミーの生活の多様性について理解するための重要な資料が含まれていると思われる。

一方、ヨーロッパ人のピグミー観については1860～70年代に比べて大きな変化があったとは思えない。研究者はピグミーはヒトであるとしているが、一部の探検家や一般大衆はヒトとサルの中間的な存在という印象を依然として持っている。また、彼らが退化した存在であるという見方は弱くなっているが、その一方で、原始的な存在と見る傾向が強くなっている。ピグミー観については、今後、ヨーロッパに留まっていた人類学者・民族学者の研究を取り上げる必要がある。彼らのほうが実際にピグミーに出会っていないことにより「純粹」に当時の考え方を反映している可能性があるためである。

このような19世紀後半の見方は社会的ダーウィニズムや文化進化論、人種主義という用語で説明することが一般的であろうし、その視点からの分析も十分意義のあることである。ただし、私自身としては、最終的には、これを古代ギリシャ（もしくは古代エジプト）から現在に至るピグミー観の一部としてとらえてみたいと考えている。北西(2011)では、1860～70年代のヨーロッパ人のピグミー観と現在の考え方の間に何らかのつながりがある可能性を指摘したが、これは1880～90年代でも同様である。原始的という見方とカラハリ論争の関係は北西(2011)で述べた。あとからやってきた強力な農耕民に追いやられた弱い先住民という考えは、学問的にはバントゥ・エクспанションの最初の段階に反映され、また先住民運動においては農耕民に圧迫・搾取されるピグミーというイメージにつながっている。この考え方やイメージが完全に事実と反していると私は考えているわけではなく、当たってる部分も多いと思うのだが、一方で先住民性に疑問を投げかけたワイルドヤム・クエスチョンのように、もう一度「常識」を問い直してみることは無駄ではないのかもしれない。

## 注

- 1：黒人、ブッシュマン、ホットtentott、コピト、部族等の用語は現在ではその使用において注意を要するとされる。ただし、本稿は19世紀後半の文献に基づいており、当時使われていた単語をそのまま用いる。黒人はNegro（英）、nègre（仏）、Neger（独）の、コピトはdwarf（英）、nain（仏）、Zwerg（独）、部族はtribe（英）、tribu（仏）、Stamm（独）の訳である。Volk（独）は民族、race（英、仏）、Rasse（独）は人種と訳す。
- 2：民族名については、元の文献での民族名の次に現在一般に通用している民族名もしくは言語データベースEthnologue (<http://www.ethnologue.com/web.asp>)に記載されている民族名

をカッコ内に付記する。

- 3：現在、ネオテニー（幼形成熟）という考え方があり、これは成熟後も何らかの未成熟の部分を残す形で進化するというもので、人類進化の仮説の一つである。しかし、Stuhlmannはネオテニーとは逆に、人間の原始的な姿として現生人類の子供のような体型や精神状態を想定しており、そこから現在の大人の体型や精神状態の人たちが進化したと考えている。
- 4：1881年にPintoによって現在のアンゴラ南西部で狩猟採集で生活をしているMucassequereという人たちが報告された。Pintoは彼らをホッテントットのタイプであるとしている(Pinto, 1881: 146-147)。彼らはコイ・サンのグループの人たちであると考えられるので本稿では取り上げていないが、ピグミーとブッシュマンを地理的につなぐ存在として注目された。
- 5：一方でStanleyは召使いのピグミーに対しては従順で勤勉であり、同じ人間としてヨーロッパ人とも共通の道徳や倫理を持つと述べている (Stanley, 1890b: 410)。このように、Stanleyの記述は自身を攻撃する邪悪で獰猛なピグミーと忠実で勤勉な召使いのピグミーで評価が正反対であるが、ピグミー全般としては前者の評価が表に出てきている。

## 参考文献

- Bastian, A. 1874. *Die Deutsche Expedition an der Loango-Küste*. Hermann Coftnoble, Jena.
- Bateman, C. S. L. 1889. *The First Ascent of the Kasai*. Dood, Mead & Company, New York.
- Casati, G. 1891. *Ten Years in Ecuatoria and the Return with Emin Pasha*. Frederick Warne & Co., London.
- Clozel, F. J. 1895. Note sur un voyage d'exploration dans la Haute Sangha et les régions avoisinantes. *Bulletin du Muséum d'Histoire Naturelle*, Tome 1: 302-305.
- Crampel, P. 1890. Les Bayagas, petits hommes de la grande forêt équatoriale. *Comptes Rendus des Séances de la Société de Géographie et de la Commission Centrale*, 16-17: 548-554.
- Du Chaillu, P. 1867. *A Journey to Ashango Land: and Further Penetration into Equatorial Africa*. D. Appleton and Co., New York.
- Dybowski, J. 1894a. Nègres nains. *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, Série 4, Tome 5: 440-443.
- Dybowski, J. 1894b. Pygmées du Congo. *La Nature*, No 1115, 15 Octobre 1894: 305-307.
- Emin Pasha. 1888. *Emin Pasha in Central Africa: Being a Collection of His Letters and Journals*. George Philip & Son, London.
- Fleuriot de Langle. 1876. Croisières à la côte d'Afrique. *Tour du Monde*, 31: 241-304.
- Flower, W. H. 1888. The Pygmy races of men. *Nature (London)*, 38: 44-46, 66-69.
- François, von C. 1888. *Die Erforschung des Tschuapa und Lulongo: Reisen in Centralafrika*. F. A. Brockhaus, Leipzig.
- Grauer, V. A. 2009. Concept, style, and structure in the music of the African Pygmies and Bushmen: A study in cross-cultural analysis. *Ethnomusicology*, 53 (3): 396-424.
- Harako, R. 1976. The Mbuti as hunters: a study of ecological anthropology of the Mbuti pygmies (I). *Kyoto University African Studies*, 10: 37-99.
- Jephson, A. J. M. 1891. *Emin Pasha and the Rebellion at the Equator: a Story of Nine Months Experiences in the Last of the Soudan Provinces*. Charles Scribner's Sons, New York.
- Junker, W. 1891. *Reisen in Afrika*. Vol. 3. IDC Publishers, Leiden.

- 北西功一、2002「中央アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民バカにおけるバナナ栽培の受容」『山口大学教育学部研究論叢』52 (1)、pp.51-68。
- 北西功一、2010a「アフリカ熱帯林の社会(2) -ピグミーと農耕民の関係-」『森棲みの社会史』(木村大治・北西功一編)、京都大学学術出版会、pp. 21-46。
- 北西功一、2010b「ピグミーという言葉の歴史：古代ギリシアから近世ヨーロッパまで」『山口大学教育学部研究論叢』60 (1) pp. 39-56。
- 北西功一、2011「ピグミーとヨーロッパ人の出会い -1860~1870年代を中心に-」『山口大学教育学部研究論叢』61 (1) pp. 51-74。
- Kund, R. 1889. Aus den Schutzgebiete Kamerun: Die Batanga=Expedition von Hauptmann Kund. in (Freiherr von D. ed.) *Mittheilungen aus den Deutschen Schutzgebieten: Deutschen Kolonialbaltt*. Kommissions=Verlag von A. Asher & Co., Berlin.
- Lenz, O. 1878. *Skizzen aus Westafrika*. A. Gofmann & Co., Berlin.
- Marche, A. 1879. *Trois Voyages dans l'Afrique Occidentale: Sénégal - Gambie - Casamance - Gabon - Ogooué*. Librairie Hachette, Paris.
- Parke, T. H. 1891. *My Personal Experiences in Equatorial Africa: as Medical Officer of the Emin Pasha Relief Expedition*. S. Low, Marston, London.
- Pinto, S. 1881. *How I Crossed Africa*. Vol. 1 R. W. Bliss and Company, Hartford.
- Quatrefages, A. 1887. *Les Pygmées*. Librairie J.-B. Baillière et Fils, Paris.
- Stanley, H. M. 1890a. *In Darkest Africa: or, the Quest, Rescue, and Retreat of Emin, Governor of Equatoria*. Vol. 1. Charles Scribner's Sons, New York.
- Stanley, Henry M. 1890b. *In Darkest Africa: or, the Quest, Rescue, and Retreat of Emin, Governor of Equatoria*. Vol. 2. Charles Scribner's Sons, New York.
- Schlichter, H. 1892. The Pygmy tribes of Africa. *The Scottish Geographical Magazine*, 8: 289-301, 345-357.
- Schweinfurth, G. 1874. *The Heart of Africa: Three Years' Travels and Adventures in the Unexplored Regions of Central Africa from 1868 to 1871*. Vol. 2. Sampson Low, London.
- Stuhlmann, F. 1894. *Mit Emin Pascha ins Herz von Afrika*. Dietrich Reimer, Berlin.
- Tishkoff, S. A. et al. 2009. The genetic structure and history of Africans and African Americans. *Science*, 324 (5930): 1035-1044.
- Touchard, F. 1861. Notice sur Gabon. *Revue Maritime et Coloniale*, 3: 1-17.
- Virchow, R. 1899. Bagelli-Zwerg in Kamerun. *Zeitschrift für Ethnologie*, 30: 531-535.
- Wissmann, H. 1889. *Unter Deutscher Flagge quer durch Afrika von West nach Ost: von 1880 bis 1883 Ausgeführt von Paul Pogge und Hermann von Wissmann*. Walther & Apolant, Berlin.
- Wissmann, H. 1890. *Meine Zweite Durchquerung Aequatorialafrikas vom Congo zum Zambesi während der Jahre 1886 und 1887*. Globus Verlag, Berlin.
- Wolf, L. 1886. Volksstämme Central-Afrika's. *Zeitschrift für Ethnologie*, 18: 725-767.
- Wolf, L. 1888. Wolf's Bericht über seine Reise in das Land der Bakuba. In (Wissmann, H., L. Wolf, C. François, H. Müller eds.) *Im Innern Afrikas, die Erforschung des Kasai während der Jahre 1883, 1884 und 1885*. F. A. Brockhaus, Leipzig.